

成分名	パラオキシ安息香酸イソプロピル
英文名	Isobutyl p-Hydroxybenzoate
CAS No.	94-13-3
収載公定書	日局 食添 EP NF
A TOXNET DATABASE へのリンク	https://chem.nlm.nih.gov/chemidplus/rn/startswith/4247-02-3

投与経路	用途
経口投与	防腐剤、保存剤

JECFA の評価

JECFA では、パラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸エチル、パラオキシ安息香酸プロピルエステルの 3 品目のみしか評価されていない。

第 67 回 (2006 年) の再評価結果、パラオキシ安息香酸プロピルがこのグループ ADI から削除され、パラオキシ安息香酸メチル、パラオキシ安息香酸エチルのグループ ADI に変更となった。

1. 単回投与毒性

該当文献なし。

2. 反復投与毒性

2-1 ラット²⁾

一群雌雄各 10 匹の F334 ラットにパラオキシ安息香酸イソプロピルを 0、0.25、1.25、2.5 又は 5%、13 週間混餌投与した。投与期間中、試験動物の死亡は見られなかった。パラオキシ安息香酸イソプロピル 2.5% 及び 5.0% 投与群の雄ラットでは、有意に体重増加の抑制が認められ、雌ラットにおいては 1.25% 以上のパラオキシ安息香酸イソプロピル投与群で同様に体重増加抑制が認められた。血液生化学的検査では、2.5% 以上投与群の雄ラットにおいて γ GPT、総コレステロール値の上昇が認められ、雌ラットにおいては 1.25% 以上の投与群で γ GPT、ALP、BUN が対照群に比較し高かった。組織学的検査ではパラオキシ安息香酸イソプロピル 2.5% 以上投与群の雄ラット及び 5% 投与群の雌ラットにおいて、小葉中心性肝細胞膨潤 (centrilobular hepatocellular swelling) が観察された。この肝細胞には脂質で満たされた小胞が、しばしば観察された。5% 投与群の雄ラットで、腎臓近位尿細管上皮細胞質内に好酸性小球体の著しい生成が認められた。これらの結果から、2 年間の発癌試験における混餌最大耐用投与量 (MTD) は、雄ラットにおいては 1%、雌ラットでは 0.5% が適当であると結論される。

3. 遺伝毒性

3-1 微生物突然変異試験 : (一)

3-2 染色体異常誘発試験 ハムスター SCEs * : (一)

人 SCEs * : (一)

* SCE: 姉妹染色体分体交換

4. 癌原性

該当文献なし。

5. 生殖発生毒性

該当文献なし。

6. 局所刺激性

該当文献なし。

7. その他の毒性

該当文献なし。

8. ヒトにおける知見

該当文献なし。

引用文献

1) 第7版 食品添加物公定書解説書 (1999)

2) Onodera H., et al. Eisei Shikenjo Houkoku 112, 82 (1994)